

ヒラメ資源の現状と今後の展開



上原伸二・井関智明・八木佑太（資源管理部沿岸資源グループ）

はじめに

ヒラメは沿岸漁業の重要な対象種であるとともに、栽培漁業の代表種でもある。日本海区水産研究所では、青森県から兵庫県にわたる日本海側の各府県と共同でヒラメ日本海北・中部系群の資源評価を行なっている。資源評価の内容は、漁獲量調査、市場調査（体長測定など；写真1）、生物調査（年齢査定など）、稚魚発生量調査などを反映して、毎年更新、公表されている。本稿では、最新版である平成23年度の評価結果（上原ら2012）に基づき、ヒラメ資源の現状を紹介するとともに、今後の展開について検討する。



写真1 新潟県村上市の新潟漁協岩船港支所での板曳網漁獲物の水揚げ

生態

ヒラメの種としての分布域は幅広く、千島列島以南から南シナ海にわたる。日本海北・中部における標識放流の結果からは青森県沖～富山湾と能登半島西岸～若狭湾でそれぞれ連続した交流が認められているが、能登半島を越えて再捕される例は極稀である（南，1997）。雄は2歳，雌は3歳

で成熟し、水深50m以浅の海域で産卵を行う。産卵期は南ほど早く、若狭湾で3～4月、富山湾で4～5月、新潟から秋田沿岸で5～6月である。ふ化した仔魚は約1ヶ月の浮遊生活を経て、水深10m以浅の浅海域に着底し、主にアミ類を食べて成長する。全長10cm以上になると次第に沖合域に分布域を広げるとともに、魚食性へと変化する。寿命は15年程度と推定されている（南，1997）。

漁業

主に刺網，定置網，底曳網によって漁獲されている。日本海北・中部系群の漁獲量は1970年代には2,000トンを超えることもあったが、その後変動を伴いながら減少し、近年は1,000トン前後で低位に推移している（図1）。2010年の漁獲量は約1,200トンであった。府県別にみると、富山県以北での漁獲割合が高く、新潟県の漁獲量が全体の3分の1を占め、秋田県，青森県がこれに次ぐ。

漁獲物の体長測定結果と漁獲量データを基にし

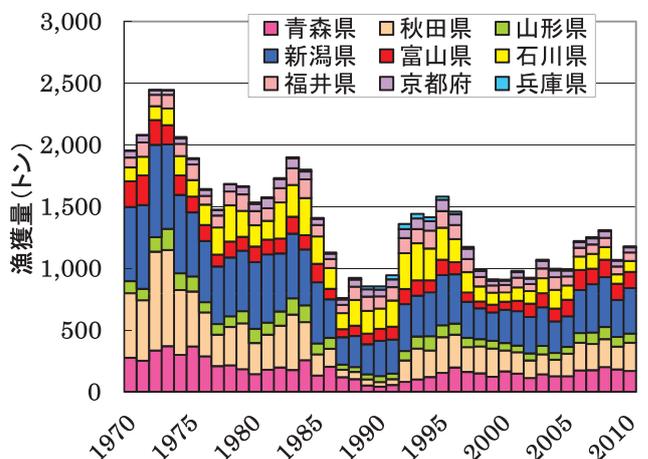


図1 青森県から兵庫県のヒラメ漁獲量の経年変化

て年齢別漁獲尾数を求めると、日本海北・中部系群全体では2歳魚以下の尾数割合が全体の約7割となっており、漁獲物に占める若齢魚の割合が高いことがわかる(図2)。府県別にみると、石川県～兵庫県では1歳魚の割合が3割以上であるが、青森県～富山県では1歳魚は3割未満と石川県～兵庫県に比べて低い割合である。

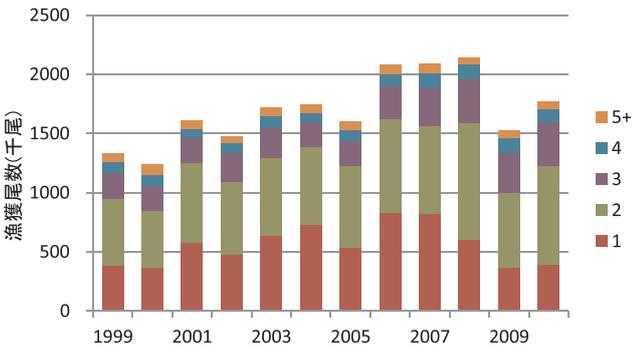


図2 ヒラメ日本海北・中部系群の年齢別漁獲尾数の経年変化
凡例の数値が年齢を表す。5+は5歳以上をまとめたもの。

資源

年齢別漁獲尾数を基にしたコホート解析により、1999～2010年の日本海北・中部系群の資源量を推定した。1999年以降の資源量はおおむね2,300～2,800トンの間を比較的安定に推移しており、2010年は2,602トンと推定された(図3)。漁獲量および資源量の経年的な推移から、現在の資源水準は低位で、動向は横ばい傾向であると判断

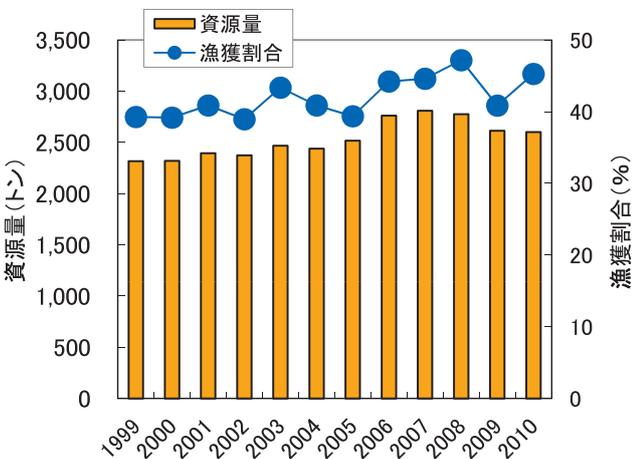


図3 ヒラメ日本海北・中部系群の資源量と漁獲割合の経年変化

された。資源量に対する漁獲量の割合は45%前後で、資源の半分弱が漁獲されている(図3)。加入資源の有効利用の観点からも親魚資源保護の観点からも、現状の漁獲圧は高いと考えられる。

今後

漁業資源の持続的利用のためには何らかの方策が必要であることは論を俟たない。日本海北・中部のヒラメの場合、既に、小型魚保護を目的とした全長25～35cm未満の漁獲体長制限や、資源添加を目的とした約300万尾の種苗放流などの方策が取り組まれている。これらの取り組みの効果が期待される一方で、将来にわたって資源量と漁獲量を維持していくためには、まだ検討しなければならないことがある。例えば、漁獲体長制限については、各海域の漁獲実態と規制サイズの関係の再整理や再放流魚の生残の実態解明を通じて、全長規制による資源管理効果の検証および規制サイズの見直しや、出荷サイズに満たない魚の適切な再放流方法の確立を図ることが必要である。また、種苗放流については、回収率と費用対効果の低迷が問題となっており、放流後の生き残りを高める手法や種苗生産コストを下げる技術の開発が必要である。

最後に、ヒラメは以前ほどではないものの魚価も高く、栽培漁業の対象種にもなっており、何かと関心の高い魚種ではある。一方で、沿岸域の漁業資源は多種多様であり、それを漁獲する漁業もさまざまである。ヒラメのみに着目しすぎて、木を見て森を見ずとならないように注意していかなければならない。

【引用文献】

上原伸二, 井関智明, 八木佑太, 2012:平成23年度日本海北・中部系群の資源評価. 平成23年度我が国周辺水域の漁業資源評価, 印刷中.
南卓志, 1997:生活史特性. ヒラメの生物学と資源培養(南卓志, 田中克 編), 恒星社厚生閣, 東京, 9-24.